

公開講座「総合2025」

気づきの先はいつも晴れ～心にかかる霧を晴らそう～

第11回 9月18日(木)13:00～14:30

口の立つやつが勝つってことでいいのか



頭木 弘樹氏
(文学紹介者)

会場：津田塾大学小平キャンパス特別教室

<講師プロフィール>

筑波大学卒業。大学3年の20歳のときに難病になり、13年間の闘病生活を送る。そのときにカフカの言葉が救いとなった経験から、『絶望名人カフカの人生論』（新潮文庫）を編訳。以後、さまざまなジャンルの本を執筆している。病気の経験を書いた『食えることと出すこと』（医学書院 シリーズ「ケアをひらく」）、『自分疲れ』（創元社 シリーズ「あいだで考える」）、口承文学について書いた『落語を聴いてみたけど面白くなかった人へ』（ちくま文庫）、初エッセイ集『口の立つやつが勝つってことでいいのか』（青土社）、編訳書『カフカ断片集』（新潮文庫）などがある。NHK「ラジオ深夜便」の『絶望名言』のコーナーに出演中。

<担当スタッフより>

「今思っていること、感じていることを伝えたいのに、うまく言葉にできない…。」そんなもどかしさや後悔を、誰もが一度は経験したことがあるのではないのでしょうか。今回の講演者である頭木さんは、20歳で難病を患い、13年間の闘病生活を通して「言葉」の難しさや大切さと深く向き合ってこられました。その経験を出発点に執筆された著書『口の立つやつが勝つってことでいいのか』では、理路整然と話せないことにも魅力があり、うまく言語化できない思いの中にこそ、その人自身の旨味が詰まっていると表現されています。私たちは、言葉に悩み、助けられ、振り回されながら、言葉と共に生きています。だからこそ、頭木さんのお話は、言葉との関係性を見つめ直すきっかけになるように思います。今年度の「総合」では、「ぼやき」や「つぶやき」を「気づき」へと変えていくことがテーマです。この機会に、「言葉にすること」について、もう一度考えてみませんか？